

Save Our Ocean

うみもり

海守会員向け情報誌
“うみもり”
サンプル号

Sample

海守メンバー大いません中! 海と地球を守っています Umimori Interview 海の話をしようじゃないか

海洋冒険家 白石康次郎
海が私たちの仕事場です①
海上保安庁
今日からはじめる
海的环境保全・社会活動

うみもり
Save Our Ocean

助成
日本財団
The Nippon Foundation

2009 Spring Vol.0 / 2009年3月1日発行
発行：財団法人「海上保安協会」海守事務局／編集発行人：海守事務局／制作：株式会社 日活アド・エン지니어
※本誌掲載の写真、図版、記事などの無断使用、転載、複製を禁じます。

会報誌「うみもり」はメルマガ、FAXNEWSに次ぐ第3の
情報提供ツールです。購読を希望される方は、同封の
申し込み用紙でお手続き下さい。詳しくは裏表紙の
お知らせをご覧ください。

UMIMORI* INFORMATION

From the Secretariat

事務局から

活動サポートマガジンが いよいよ創刊します!

会 報誌「うみもり」は、会員の皆さんによる地域活動を充実させ、全国に広げていくためのプラットフォームです。ブログやメルマガをさらに掘り下げた海の時事ニュース、皆さんが企画された活動の紹介、すぐに参加できる海の活動リスト、海守の仲間からのメッセージなど、ページを開けば「グッと海に近寄れる」内容を目指しています。また、会員の皆さんには、単に読んでいただくだけでなく、地域の特派員として紙面創りに参加していただけるような工夫を凝らしていくつもりです。これまでメルマガをご覧になれなかった方はもちろん、多くの方々にご購読いただければ幸いです。本誌が皆さんにとって、海について考え、行動するきっかけになることを祈っております!

From the Secretariat

皆さん一人ひとりが「うみもり」の 特派員です。

海 守事務局では、来年度から発行する会報誌「うみもり」を通じて、皆さんの活動をサポートさせて頂ければと願っています。皆さんの活動状況、地元で起きている海の問題や課題など、全国の読者に知ってもらいたい記事やご意見をお待ちしています。取り上げさせていただいた記事やテーマをもとに、多くの読者との意見交換や、必要とするサポートやアイデアの募集など、さまざまな活用ができるような仕掛けも随時展開していく予定です。つきましては、皆さんからの会報誌「うみもり」に対するご意見、ご要望をお待ちしています。どのような内容でも結構です。ハッと気づいたことや思いついた内容を、ドシドシ事務局までお寄せください。会報誌「うみもり」は、皆さんと一緒に、皆さんの「海守」活動を育てていくために生まれた活動サポートマガジンです。

例えば、こんなことをお聞かせください

1. 会報誌「うみもり」で報告したい事柄や、あなたの知っている海の活動。
2. あなたが主催または参加している海の活動で、具体的なサポートを必要としている場合、その内容(船を出せる人募集!など)。
3. 会報誌「うみもり」で取上げてほしいテーマや企画など、記事全般に関するご要望。
4. その他、海守に関するご意見やご要望。

ご意見・ご希望・ご感想はファックスまたはEメール、もしくは同封の返信用封筒をご利用ください。
FAX: 03-3552-8012 E-mail: info@umimori.jp

表紙写真:水中写真家 錦石 昭(水中造形センター)
海守会員番号:13139632

Editor's postscript 読んで字のごとく「海守」とは海を守ることを意味しています。しかし、海の何をを守るのかについては、人それぞれでしょう。海の美しい景観を守りたい人、海の生活を守りたい人、海の思い出を守りたい人……。海の安全と治安を日々守り続けている海上保安庁のサポートが私たち「海守」メンバーの大切な役目ですが、必ずしもそれだけが目的というわけではありません。立場や生活、意識や考え方の違いによって、それぞれ違った「海守」活動がそこには存在してもいいのです。しかし、その逆も言えます。多くの考え方があなかで、同じ意識を持った仲間も多くいるという事実です。この会報誌「うみもり」を、そんな仲間たちと知り合えるための情報ソースとして役立てていただければと思います。

1

会報誌「うみもり」(年3回発行)の発行に伴い、これまで年度末にお送りしてきたダイレクトメールは廃止します。今後は、メルマガ(週2回程度)またはFAXNEWS(月1回程度)をご登録いただけない方で本会報誌をご購読いただけない場合、海守事務局からの情報提供が受けられません。メールアドレスかFAXのご登録、もしくは会報誌のご購読をお願いします。なお、会報誌「うみもり」は独自の記事も掲載しますので、メルマガやFAXNEWSと合わせてご購読いただくことをお勧めします。
送付時期: ①2009年6月下旬~7月上旬
②2009年10月下旬~11月上旬
③2010年2月下旬~3月上旬

2

メールアドレスやFAXNEWSの登録番号の変更は、海守ホームページから可能です。なお、新規登録や変更の場合は、必ず「メルマガ(FAX)配信を希望する」にチェックを入れてください。
☞www.umimori.jp
その他、ご不明な点は海守事務局までお問合せください。
☞info@umimori.jp ☞電話:03-3552-7001

3

今回サンプル号をお送りした会報誌「うみもり」は、年間購読形式です。ご購読いただける方は、同封の振替用紙にて、年間購読料(印刷・発送費のみご負担ください)1,000円をお振込みください。多くの皆さんのご購読をお待ちしております!なお、会報誌「うみもり」は日本財団の助成により制作されています。

4

海守事務局は以下の通り移転しました。なお、メールアドレスに変更はありません。
旧: 〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-15-16
海洋船舶ビル8階
電話:03-3500-5707 FAX:03-3500-5708
メール:info@umimori.jp
新: 〒104-0043 東京都中央区湊3-5-10
セントラル新富町ビル6階(財)海上保安協会内
電話:03-3552-7001 FAX:03-3552-8012
メール:info@umimori.jp



海守メンバーただいま奮闘中!

海と地球を守っています

Episode ① 石垣島川平湾の環境保全活動

辻維周さん

海守会員番号：13040592

人間が身勝手な生産活動することでサンゴの生態系が崩れていく。日本百景のひとつに数えられる川平湾。その自然保護活動をモデルケースに、石垣全体の自然保全につなげていきたいと、東京出身のひとりの男性が立ち上がった。辻維周さん52歳。自分がやらなければ誰がやるというのだ。地元の人たちの協力とともに、今、死滅寸前のサンゴを守るという大きな挑戦に、強い意欲と情熱を燃やす。

人気高き観光地に生じたヘドロ問題

日本百景のひとつでもある川平湾。石垣島の顔としても親しまれている場所だ。そこにおけるサンゴの死滅が深刻化している。その大きな原因が、海底に体積するヘドロ。川平湾には今、薄いつもでも60センチくらい、深いところでは1mほどのヘドロが、海底に体積し、サンゴの死滅化が進んでいる。「湾内の環境が急激に悪化しています。最近、サンプリングで調査したところ、COD*の濃度も100PPmを超えており、間違いない、その原因は、生活排水による汚染だということ

がわかります」環境文化研究所長の辻維周さんは、今から15年ほど前より、川平湾におけるヘドロの現状調査に取り組んできた。「湾の一番奥の方に、海底がすり鉢状になっているところがあり、そこにどうしてもヘドロが溜まってしまっんですね。宅地造成によって、多くの赤土が海に流れ込む。台風などによって発生した波でサンゴがバラバラとなって沈んでいきます。生活排水の有機物と、赤土と、サンゴの砂、これらがまつまつて、ヘドロとなっていきます」サンゴの繁殖状態を知るために被度という数値が利用される。敷地面



グラスボートでエコツアーを行う辻さん

積に対して何パーセントくらいサンゴが生息しているかを理解する数値だ。海底にサンゴが密集している状態で70〜80度くらい。川平湾も20年前はそういう状態だった。それが最近はずいぶん近い。サンゴ鑑賞で知られるガラスボートも15年前は、湾の手前付近でも十分に楽しめたが、今はほぼサンゴはない。「サンゴはあと2〜3年で全滅する。私はそう思っています。川平湾内のも

自分たちがやらねば誰がやるんだ

10年程前から沖繩への移住者の数が急増しはじめた。青い海とハイビスカスといった亜熱帯の海のリゾートとして人気の高い国内旅行先だった沖繩。リピーターから長期滞在、やがては移住へと発展していくケースも少なくない。まさに「観光地」であった沖繩が「移住対象地」として発展してきたのだ。石垣はその移住対象地としても最も人気が高く、今なお、リゾートマンションやウイークリーマンションの建設ラッシュは続いている。

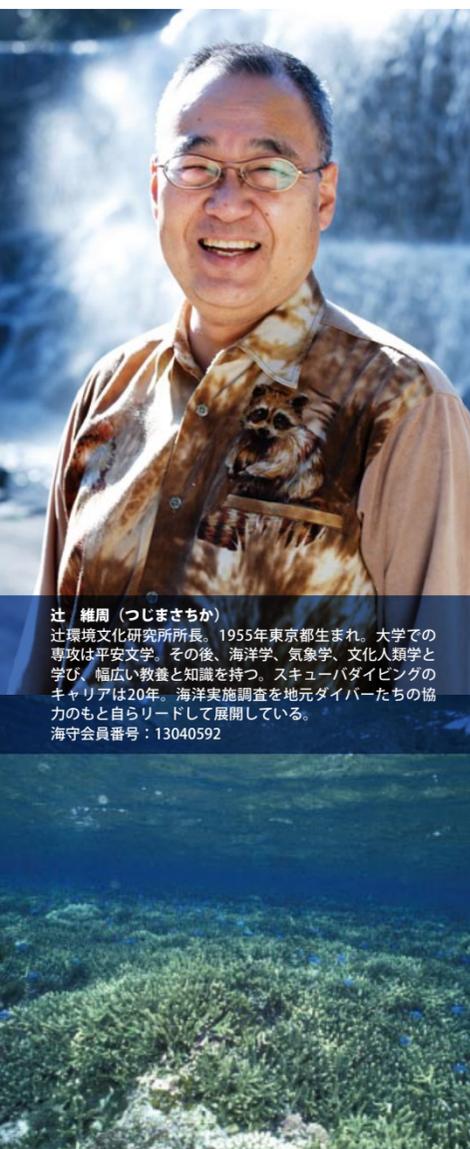
「川平湾の問題で一番難しいことは、行政です。観光客獲得のため誘致してきた結果がこれ。こうした現象に対して、観光課は困った、とた

め息をつくのですが、現実的な対応がなされない。ましてや環境対策課に関していえば、水質検査は国の基準ですで行われており、その結果が問題ないと出ているから何もする必要はない、との一点張りなんです」行政にお願しても、なかなか動いてくれない。だから、自分たちがやるしかない。市民が動くことがデモンストレーションとなってくれば、やがて国の事業として動きだすかもしれない。辻さんは東京出身。内地の人間が地元の人間を説得して歩くことの苦労は計り知れない。事実、辻さんの活動は足を引っ張られたり、ネット上に中傷や誹謗を書かれたこともあった。

この美しい島をなんとか守り続けていきたい

「なぜか、この島を自分が守るという仕事を、自分がしなければいけない、そういう気になってしまっ

こんなにも綺麗な場所を、今以上に悪くしてはいけません。これは日本の財産だ。



辻 維周 (つじまさちか) 辻環境文化研究所所長。1955年東京都生まれ。大学での専攻は平安文学。その後、海洋学、気象学、文化人類学と学び、幅広い教養と知識を持つ。スキューバダイビングのキャリアは20年。海洋実施調査を地元ダイバーたちの協力のもと自らリードして展開している。海守会員番号：13040592

たんですね」なぜ石垣に魅せられたかという理由を聞くと、実は自分でもはっきりわからな

「日本珊瑚礁学会などへの学会発表も行ったつもりでしたが、専門家の間だけでの議論となっていく。もともと現場で、現実を変えていくことをやりたかったんです」興味のあるものには迷わずに、どんどん入り込んでいくタイプ。「思いつくままに、活動を続けてきましたね。いろいろな人のところに話をしに行き、やがて講演を頼まれ、それを聞いた人が共感してくれて……」

地元の多くの人たちが、賛同してくれて活動に協力をしてくれる。辻さんの言葉に、学者だから故の説得力もある。何か大切か？なんで守らなければいけないのか？という疑問を説明するときに、辻さんの幅の広い知識が役に立つ。声を大きくしたからって、意味はない。辻さんの人柄、そして

睡眠時間は3時間から4時間。もちろん休みもない。毎月、環境文化研究所を置く東京、大森の自宅と、八重山の簡易宿泊場所との往復を繰り返す。具体的に多くの人たちの協力を得られるようになってきたのはここ数年の話。今まで長く活動を続けてきたが、辻さんにとって、川平湾の環境保全活動はこれから本番である。

※COD：Chemical Oxygen Demandの頭文字で科学的酸素要求量と呼ばれる。水中の有機物を酸化剤で分解する際に消費される酸化剤の量を酸化剤として示した値で、海水や湖沼水質の有機物による汚染状況を測る代表的な指標。

辻環境文化研究所

石垣島川平湾でのサンゴ礁の生態実地調査、サンゴ礁の被度や水質チェックなどの調査ならびにそのデータ解析を行う。また、サンゴ礁死滅に関係があるとされているオニヒトデについて、その生態と繁殖のメカニズムについての研究が進められている。最近では、石垣島地元のダイバーや陶芸家らとともに川平湾に堆積したヘドロで焼き物を作るという試みにも乗り出している。ヘドロの有効利用に加え、観光客や子どもたちの環境教育の一環としての活動を展開中だ。

代表：辻 維周
E-mail: crownstarfish@gmail.com



オニヒトデの水桶内実験。オニヒトデの駆除がサンゴ礁のためには本当に必要なかどうかについても研究が行われている。

海守メンバーだいたい奮闘中!

Episode ③ パラオのサンゴ養殖・移植事業

知花真二さん

海守会員番号33015684

日本のほぼ真南、直線距離にして約3200km離れた太平洋のミクロネシア地域に浮かぶ200ほどの島々からなる国、パラオ共和国。サファイヤブルーの海に開かれた風光明媚な南洋の楽園は、ダイビングスポットとしても有名だ。そこでひとつの事業に取り組んでいる日系パラオ人がいる。知花真二さん。NPO「コーラルセーバーズ」の代表である。知花さんが行っているのは、絶滅の危機に瀕するサンゴを養殖し、海に移植するという、世界でも稀な事業だ。



海に囲まれて育ってきた自分。その自分を映す鏡のような存在の海に、恩返しをしたい。

知花真二（ちばなしんじ）
NPO コーラルセーバーズ代表。1962年沖縄県生まれ。1989年、パラオで水中撮影専門のコーディネート会社を設立。その後、海水熱帯魚の輸出やサンゴの養殖・移植の研究を始める。その技術がパラオ政府から認められ、サンゴを保護する団体を創設。2006年12月、日本での活動拠点としてNPO コーラルセーバーズを立ち上げ、国内でサンゴ保護を軸に、地球環境保全のためのさまざまな啓蒙活動を展開している。
海守会員番号33015684

僕にとつて海は、
空気のようなもの

「子どもの頃、猫を17匹も飼ってしまっただけ。その餌をとるために潮が引いた海の浅瀬に取り残された大きな魚を、鉗でとってきたものです。海は昔から僕にとつて大きな遊び場だったんですよ」

パラオでサンゴの養殖・移植事業に取り組む知花真二さんは、懐かしそうに語った。知花さんの父はパラオ生まれ、そして祖母はパラオ人。その

ため知花さんは日系パラオ人である。

もともと知花家は沖縄の読谷村で800年近く漁師をしてきた家系なのだという。生まれたのは米軍統治下の沖縄。その後、パラオで育ち、高校・短大時代は沖縄で過ごした。パラオも沖縄も、海に囲まれた島である。知花さんは海とともに生きてきたのだ。

「僕にとつての海は、空気のようなもの。絶対に必要なものです」
そんな知花さんは、なぜサンゴと関わるようになったのだろうか。

きっかけは今から20年以上前にさかのぼる。かねてから知花さんはパラオに産業を興したいという希望を持っていた。そして、たまたまサンゴの産卵を目にしたのである。まだエルニーニョ現象による被害に環太平洋が気づいていなかった時代である。知花さんは、サンゴを養殖して観賞用として利用できないかと考えた。目の前には、それまで自然界の多くの生物が鑑賞目的で採取されてきたという事実がある。パラオ共和国政府も興味を示したという。

サンゴの20%が絶滅の危機に瀕している

サンゴという生物は、地球上でも非常にユニークな存在だ。太平洋には800から1000種のサンゴが生息していると言われている（大西洋はわずか36種）。

「太平洋の平均深度は2000m。でも、サンゴが育つことができるのは、海の底から山のように突き出た水深50から100m程度の場所です。しかも赤道から緯度にして南北20度前後の熱帯に限られています。サンゴが生きていける環境は面積にして全海洋の2%にしか過ぎません。そしてそのうちの20%が絶滅しているのです。サンゴは大気中にある二酸化炭素を凝縮させ固体に変えるので、大気中の二酸化炭素濃度の減少に貢献できると考えられています。プランクトンが少ない南洋の海では、サンゴ礁に魚が集まることで豊かな海をよみがえらせることができるのです」

政府との協力のもとで始まった研究は実を結ぶ。そして養殖の目的も、地球環境の問題が浮上するとともに、サンゴを絶滅の危機から救うという方向にシフトしてきた。2007年時点でパラオに400種類以上あるといわれるサンゴのうち41種類の増殖に成功。これまでに増殖し海に移植したサンゴは18万株以上にのぼる。現在でも月平均4000株のサンゴを海に返しているという。

サンゴを養殖すること自体はそれほど難しくないと知花さんは語る。絶滅の危機にあるサンゴ礁を復活させるためには、大量のサンゴを養殖することができれば意味がない。

技術的に難しければ、プロジェクトそのものが成り立たない。生存率の高い方法で、しかも安価でできることも大切な条件だ。しかし、難しさはむしろ別のところにある。

「いちばん難しいのは法律なんです。沖縄では規制があつて申請をしないとサンゴの養殖や採取ができません。ならば卵からすればいいかといえ、それも非常に難しいのです。サンゴは普通、卵から殖えていきます。でも、卵からだと育つ確率が低く、サンゴの死滅のスピードに再生が追いつかないんです。もっと急がなければというので、枝分けをして殖やす養殖のような方法が求められています。技術の問題ではないんです。法律を作っているのは人間です。どうすればサンゴを守るのか、海をみて考えればすぐにわかることだと思うんですが……」

この他にも、サンゴの遺伝的多様性を守る観点から、例えばパラオのサンゴは沖繩に植えられないといった制限があり、サンゴ移植は「筋縄ではいかない事業なのである。それでも長年このプロジェクトに取り組んできた知花さんの努力の結果、養殖したサンゴの株は着実に海に根つき、そのエリアは広がっている。移植から6ヶ月後、90%を維持しているという生存率の高さも注目に値する。

「移植したサンゴがバスケット

ボールぐらいの大きさに育ち、そこに魚が棲みついてくれたのを見たときは感激しましたね。最近、コーラルセーバーズの活動も少しずつ認知されるようになってきて、いろいろな人たちがサンゴの移植に協力してくれるようになりました。子どもたちやオーブンマインドな大人たちが、私たちの活動に賛同してくれています。大変うれしいことです」

「コーラルセーバーズ」を100年、200年続くNPOにしていきたい

サンゴの養殖・移植を広めることで、世界中の人々が海を守る活動に関わるきっかけを提供ができればと知花さんは考えている。その活動はまだ始まったばかりなのである。「私たちが今、していることは、ほんの1ページにすぎません。私

ただで終わらせてしまつては意味がありません。これから『コーラルセーバーズ』を100年、200年続くNPOにしていきたい。そのためにいろいろな人に関わつて欲しいのです。みんなで海を守



れないか、新しい方法を行動に移すことで、これまで関わりのなかった人たちが携わるることのできるきっかけとなるはず。そのためにサンゴ移植の技術を活かされればと思えます」

サンゴは大きさ、材料が細かく定められたポットに植えて養殖される。このポットは、海に入ると補助具自体も2年程度で分解され自然に還る素材でできている。活動の趣

旨に賛同する人は、サポーターに登録し、送られてきたポットに名前やメッセージなどを書き込んで返送すると、生育管理をして海に移植される。これが今、知花さんが地元パラオで実施している「サンゴの森プロジェクト」である。自分のサンゴが南の海で育っている。何とも夢のある話だ。海守も「海守サンゴの森」という名のもとにこの活動を応援している。また、「地球環境サンゴ学習プロ

コーラルセーバーズ



サンゴ礁の保護・増殖を軸に海洋の環境保護活動を行っている非営利活動団体。水温上昇などにより、各地でサンゴの白化現象が生じ、美しいサンゴ礁は絶滅の危機に瀕している。こうした状況に対し、サンゴの養殖活動を第一歩として、豊かな自然の海を取り戻し、海洋環境の保全、地球温暖化防止に貢献することを目的として設立された。コーラルセーバーズが開発したサンゴの増殖技術(特許申請中)は世界的にも注目されており、現在パラオをはじめ日本・アメリカ・フィリピン・オーストラリアで活動を展開。



代表：知花 真二
URL: <http://www.coralsavers.or.jp>
E-mail: info@coralsavers.or.jp

あなたが公認特派員！ 海守メンバーの活躍を教えてください。

会報誌「うみもり」では海守メンバーの皆さんの活躍ぶりを毎月、レポートしていきます。今回は辻さんと知花さんのお二人に登場いただきましたが、次回からは、あなたもしくはあなたの周囲にいらっしゃる方々をご紹介します。このコーナーで取り上げたいと思う人や団体をご存知でしたら、事務局までお知らせください。具体的に、サポーター(例:船を動かせる人、各種イベント協力者など)を探している方などは特に歓迎いたします。

Japan Coast Guard

海上保安庁の仕事

日本の領土を囲む海を活躍の場としている海上保安庁。その具体的な任務は、ここで紹介するように広範囲に渡っています。

治安の確保

海上の秩序を守るための活動。海洋権益の保全に関する業務や、密輸・密航・密漁などの海上犯罪対策、不審船・工作船、海賊、テロへの対応などを通じて安全・安心な暮らしを支える。

生命を救う

沈没・転覆・座礁・漂流・衝突・火災など、海上で航行中の船に起こる事故に対し、迅速・的確な捜索救助活動を行う。またマリネジャーを安全に楽しめるように啓蒙活動も実施している。

青い海を守る

海洋環境保全意識を高める「指導・啓蒙活動」、海洋汚染の現状把握のための「海洋汚染発生状況調査」、廃棄物の不法投棄や油の不法排出などを摘発・原状回復を図る「監視取締り」を行う。



災害に備える

船舶の衝突・乗揚げによる油などの排出、事故災害、台風や津波などの自然災害など、甚大な被害をもたらす、社会生活に影響を及ぼす災害に対し、迅速・的確な対応により被害の拡大防止を図る。

海を知る

船舶が安全に航海したり、災害を防ぐために、最先端技術を駆使した海洋の科学的調査を実施。また、海に関するさまざまなニーズに応えるために、社会に貢献する海の情報を提供する。

航海を支える

交通、物流、マリネジャーなど、多様な船舶活動に対し、パトロールや航路標識の整備のほか、広く情報を提供することを通じて、海難の発生を未然に防止し、安全な航海を支える。

海を繋ぐ

世界各国は海を隔てて繋がっている。経済活動や人的交流で重要な役割を担う海の安全・安心を守るために、各国や国際的な機関との協力関係を強化し、海上保安業務のグローバルな展開に取り組んでいる。



海が私たちの
仕事場です

海の安全・治安の 確保が任務です

海上保安庁

緊急通報用電話番号「118番」を多くの人に広めよう

火災が起きたり急病人・負傷者が出たとき、通報すべき番号「119番」は誰でも知っています。では「118番」は？ 海守のメンバーにとって、これが「海上における事件・事故の緊急通報用電話番号」であることは当たり前かもしれませんが、一般の人にはまだまだ知られていないのが実情です。

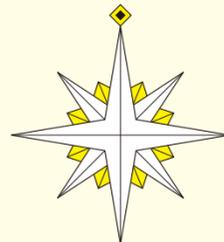
海上保安庁が、警察の110番、消防の119番のように、局番なしの3ケタの覚えやすい数字「118」を緊急時の電話番号として運用しはじめたのは2000年5月1日から。2006（平成18）年度、海難等発生情報の第一報で118番が利用されたのは1013件で、全体の37%でした。そのうち携帯電話からは759件。携帯電話が普及に少しずつ貢献していることがわかります。一方で、海上保安庁はイタズラ電話への対応に苦慮しているという問題もあります。

118番通報については、会員の皆さんから「協力したいが、何を見たら通報すればいいのかかわからない」という声が寄せられていました。そこで海守では、来年度から海上保安庁との連携を強化し皆さんには、海上保安庁の各部署が必要としている具体的な通報要請をお届けできるように準備を進めています。

こんなときは「118番」

- 海難人身事故に遭遇した、または目撃した。
- 油の排出等を見つけた。
- 不審船を見つけた。
- 密航・密輸事犯等の情報を得た。

いつ、どこで、何があったのかを冷静にお伝えください（加入電話、公衆電話、携帯電話、PHS、船舶電話などから利用できます）。



海上保安庁シンボルマーク（コンパスマーク）

※平成19年4月1日から、「位置情報通知システム」が導入され、GPS対応携帯電話などからの通報に合わせて位置情報の通知を受信し、通報者の所在位置を迅速に把握できるようになりました。

重要な役割を担っています。関係機関との連携により啓蒙・奉仕活動を行うことは、海上犯罪の予防や海洋環境保全に貢献することにつながるのです。とりわけ海上保安庁の緊急通報電話番号「118番」の普及は、「海

守」の大きな使命と言えます。どのような状況で、何があったら118番通報をするのか。いかにイタズラ電話を防ぐのか。認知度とともにモラルを高めるためにも、「海守」の活動を広めていくことが求められています。

日本のような島国において国境は国家的な主権が及ぶ領海（12海里）約22km）までということになり、さらに排他的経済水域も含めると、その範囲は実に国土面積約38万km²の11・8倍にも及びます。また米国の「海上における捜索及び救助に関する国際条約」により、本土から南東方面1、200海里（約2,200km）に及び

このことから明らかのように、海の環境や安全を守るためには、海上保安庁だけでなく、広く一般市民による協力が欠かせないと言えます。そこで日本財団と海上保安庁、海上保安協会の協力により設立された「海守」も、日常生活や社会活動のなかで海を見守る「目」としての活動を通じ、

地上では交通安全、救助、治安維持、防災などの活動は警察や消防が行っています。これに対し、海上で安全や治安の確保を目的に活動しているのが海上保安庁です。

海上保安庁の役割は犯罪捜査や公安活動のみにとどまりません。汚染防止などの環境保全や海難救助等を通じてのマリネジャーの安全確保、離島の急患搬送、船舶火災の消火、海上交通の支援など実に広範囲に及びます。

約35,000km²。これは日本の海岸線の総延長です。四方を海に囲まれた日本は、国土面積に比べて海岸線が長いのが特徴で、総延長の単純な比較でも世界6位、人口1000人当たりで換算すると、世界1位となります。さらに領海排他的経済水域（経済的な主権の及ぶ水域）200海里（約370km）は約447万km²で世界6位に相当します。海上輸送に目を移せば、海上貿易量は世界のおよそ7分の1を占める約9億4999万トン、国際貨物のうち海上を利用しているものは金額ベースで71%、重量ベースでは実に99%にも上るのです。

広大な海域が、日本の担当する捜索救助活動に責任を負う捜索救助区域と定められました。これらすべての区域が、海上保安庁が活動する範囲に含まれるのです。加えて海は大陸のようには国境が明確ではなく、また海上輸送路も地上のような通路としての道路はなく、領海侵犯や密入国、密輸入などを取り締まることは容易ではありません。

さらに言えば、漁業、海底資源の利用、マリネジャーなど、日本は生活のさまざまなレベルで海と密接なつながりをもっています。

にもかかわらず、日本にとって欠かせない海の安全・治安を守る海上保安庁の職員はおよそ12,550人に過ぎません。全国の警察官の約255,000人と比較すれば、海上保安庁がいかに少人数で広大な領域を管轄しているかがわかります。

海上保安庁の役割は犯罪捜査や公安活動のみにとどまりません。汚染防止などの環境保全や海難救助等を通じてのマリネジャーの安全確保、離島の急患搬送、船舶火災の消火、海上交通の支援など実に広範囲に及びます。

にもかわらず、日本にとって欠かせない海の安全・治安を守る海上保安庁の職員はおよそ12,550人に過ぎません。全国の警察官の約255,000人と比較すれば、海上保安庁がいかに少人数で広大な領域を管轄しているかがわかります。

海の話

Umimori Interview
ないか

ひとたび港を離れたら、そこには愛する艇と見渡す限りの海があるだけ。海の真つた中で自分自身への挑戦を続ける冒険家。その人の目には、いったいどんな海が見えているのだろうか？ 単独世界一周ヨットレースに挑戦し、見事2位という快挙を成し遂げた海洋冒険家、白石康次郎さんに海の話伺いました。

——ヨットで世界を回ろうと思った動機は？

子どもの頃、鎌倉の海で遊んでた時に、まず「海は大きな」と感じたこと。そしてもうひとつは好奇心ですよ。この海の先に何かあるんだろう、と。そして、行ってみたいという気持ちだけ(笑)。

僕にとって最初に海を渡ったのは、実はマグロ船でした。高校生の時、学校の実習船に乗って2回ハワイに行っただけですが、それが最初の僕の「外洋」でした。

海を渡って世界一周をしたかったという子どもの頃の夢、それがそもそもの動機なんです。ヨットはただ手段であって、世界一周をするためには、日本は陸続きじゃないから、車じゃ無理だし！。

水産高校を選んだのも、海外に出るには自分が船乗りになればいいと思ったから。自分で技術を身につけてね。そこにいけば船の教育を受けられて、自分自身で世界一周をしたかったという子どもは、みんなもつと意識するべきなんです。

佐藤一斎が書いた言志四録の中に、僕の大好きな言葉で『太上は天地自然から学び、次に師から学び、次に経から学ぶ』というのがある(※1)。要するに、簡単です。最も優れた者は天地自然から学ぶ。次に師から、お師匠さんや先生から学ぶ。次にお経、教科書、テキストから学ぶ。これ、もつともです。特徴的なのは、二番目三番目はしよせん、人間の作り出したものです。一番上の天地自然っていうのは人間が作り出したものではないんですよ。そこから学ぶ事が一番尊いんだと。

今、自然を守ろうとか海を守ろうとか、環境破壊だとか言ってますけど、よく考えてください。心を透明にして。自然がね、人間に対して「守ってくれ」だなんて言った事なんてないですよ。もうひとつね、自然が破壊された事なんかありますか？環境は常に変化しているもんなんです。確かに恐竜が絶滅したり、いろいろな文化がなくなりましたよね、でも破壊されたものはないですから。温暖化、困っているのは誰ですか？海が汚れて困っているのは誰ですか？人間ですね。つまり、これ人間の都合なんです。人間の都合の良い自然が壊されているから、人間はあたふたしているんですね。

——海の変化をどうお考えですか？

よく聞かれる事ですが、今、海はきれいになっています。僕らが子ども

身で海を渡れますよ。

——描いていた夢のイメージとマグロ船とは、かなり違うんじゃないですか？

いや、そんな事はないですよ。ヨットは見た目カッコ良いけど、海の表面を走っているわけですよ。で、マグロ船も同じく海を走っているんですが、いろいろな魚が釣れてくるわけ。カジキ、マグロ、深海魚、サメ……。クジラも見れたし。海自体を知るにはマグロ船が一番ですね。素直に感動しました。

——自然の中に一人入った時の孤独感、ヨットマンによくある孤独との戦い、そのあたりは？

それはいいです。孤独と戦ったことなんてない。孤独ではないですから。ファイブオーシャンズ(※2)以外の単独航行でも孤独で寂しい思いをしたことはないです。嵐とぶつかって恐いとか、その時の恐怖感もないです。なぜなら、そういうものなんです(笑)。要するに望んで僕は



「海が守ってくれなんていいましたか？」なんて。ハツと気がついてくれるんです。

頃、鎌倉の海岸で泳いでいると体に油がつきましたよ。汚かった。今よりはるかに汚い。鶴見川や多摩川なんて水面に泡が漂ってたでしょ、昔は。今は、はるかにきれいになっている。それは非常に我々は良くやっただけです。調和の第一歩。非常に良くやりました。水質が上がった。昔、品川の天王洲アイルは東京中の糞尿を集めてそれを捨てていた場所。今は、そういうのはやめようよと、衛生的にも。

だから先進国は、水質はほとんどもう心配はないんですね。すべてのゴミは海に通じるんですね。最後は海に流れていくんですよ。だから途上国には、日本が貢献できる科学技術によって、水質を改善していく必要があるんです。



日本の企業が努力して、あれだけ海と川をきれいにしたんですよ。それは讃えるべきではないでしょうか。それは誇りに思っていると思うのね。その技術を世界に配信して、それでまた収入が得られれば、これは素晴らしいことだ。——今後、我々にとって何が大切だと思いますか？

『ハリネズミのジレンマ』という話があつて、よく精神科医が使っていますが、簡単にいうと、地球という洞穴に、『自然君』『人間界君』という二匹のハリネズミがいる。寒いからお互い体を寄せ合うんですが、お互いの針が体に当たって痛い。痛いから離れる、離れると寒い、寒いから寄せ合う、針が刺さって血が流れる。二匹が、その後どうなったかという、やがて一番良い距離を生み出すんです。昔は圧倒的に自然界に制圧されていた、でも人間は道具という力を持って、今度は自然界にインパクトを与えた。それは双方にとって快適ではない。一番適切な距離感っていうのは何なのか？今から江戸時代に戻るといえるのはナンセンスな話です。だから、ここまでは我慢しようよ、不便を味わおうよ。そのかわり、綺麗な空気だとか、そっちをとりましょうよ。今はちょうど、その距離を計っているところですね。

これから我々は豊かさを求めるのではなく、美しさを求めていく時代になっていくと思います。我々は今後、どういふものが望みなのか？何が幸せなのか？というのを考えていくときなんだと思います。どっかに振れるというのではなく、一番良い調和を見つけて出す。反対、賛成ではなくて、どの程度が良いのか？一番良い音色がなる場所は？不便さと便利さ、便利を突き詰めると殺伐とするなら、多少不便でも緑があった方が良くないか。両方100%は無理なんです。だから調和です。一番良い頃合いを探します。そういう作業をするのが今の時代かなと思つてます。

※1：4年に1度開催される『最も過酷な』ヨット外洋レース。2006年10月にこの第7回大会に白石康次郎氏が60フィートのクラスで参戦。8ヶ月に渡る健康の末、2位入賞。日本人初の快挙を成し遂げた。

※2：『太上は天を師とし、その次は経を師とし、その次は経を師とす』佐藤一斎／言志四録二条

白石康次郎さん

自分より大きなものに抱かれるというのが、僕は好きなんだらうね。宇宙、大好きだし。海も大好きだし。夢がある。ワクワクするんですよ。

白石康次郎 (しらいしこうじろう)
海洋冒険家。1967年東京都生まれ(神奈川県鎌倉市育ち)。1986年に第一回単独世界一周レース優勝者の故多田雄幸氏に弟子入り。その後、ナホトカ室蘭「日本海ヨットレース」をはじめ多くのレースに参戦。1991年、シドニー-伊豆松崎、太平洋単独縦断に成功する。1993年世界最年少単独無寄港世界一周達成。その後も日本新記録を樹立する活躍を続け2007年5月、単独世界一周ヨットレース「SOCEANS」クラス1に日本人として初挑戦。2位という快挙を成し遂げる。



今日からはじめる 海の環境保全・社会活動

人間の都合によって変わりつつある海の環境。この事態がもたらす生態系（つまり最後は人間）への悪影響に気づき始めた今だからこそ、何か海の環境に役立つことをしてみたい！
このページでは、海や海辺をフィールドにした活動や海守会員の皆さんが企画した活動を紹介していきます。このページに掲載したい活動や、団体などがありましたらどうぞ、海守事務局までお寄せください。今回のサンプル号では、共同でプロジェクトを進めている団体や海守の活動にご協力いただいている団体をご紹介します。次号からは、このページが会員さんの企画でいっぱいになることを夢見しています！

JEAN・クリーンアップ全国事務局

海のゴミは景観を汚すだけでなく、海洋生物を絡まりや誤食で傷つける地球環境問題でもあります。JEANでは、春と秋に全国規模のクリーンアップやゴミ調査を展開。秋は国際行動として市民参加型のゴミ調査と清掃を同時に行い、調査結果はゴミを元から絶つために役立てています。ゴミによる海洋動物の被害写真や、全国各地で収集した漂着物を詰めたトランク・ミュージアムの展示や、環境学習教材の提供、出前講演なども行っています。



E-mail: cleanup@jean.jp
http://www.Jean.jp

WWFジャパン (財団法人世界自然保護基金ジャパン)

WWF(世界自然保護基金)は、100を超える国々で活動する世界最大の民間の自然保護団体です。人と自然の共存をめざして、世界の自然を守る活動に幅広く取り組んでいます。WWFジャパンでは、その地域にすむ人々と自然とのつながりが、生物多様性を守りつつ、地域の人々の生活も豊かにするような活動を、様々な関係者と協力してすすめています。「人の暮らしとともにこの自然を守りたい」WWFジャパン活動はホームページでご覧いただけます。



E-mail: communi@wwf.or.jp
http://www.wwf.or.jp/



NPO法人コーラルセーバーズ CORAL SAVERS

私たちは、サンゴ礁の保護・保全を目的に「植え付け活動」をしています。研究を重ね養殖・増殖に成功。ひと月約4000株、これまで約18万株を海に戻してきました。現在45種の母サンゴから株分けし、サンゴ砂と水で作ったポットに植え、細やかなケアを行い、生存率は90%以上となっています。サンゴの生態系から地球温暖化を考える環境授業などでも活動中。ポットに名前や夢を書くことで、どこにいてもサンゴの親となるのが可能です。サンゴ礁は木と同様に二酸化炭素を吸収し多くの酸素を排出する、地球温暖化を防ぐ海中の熱帯雨林です。



E-mail: info@coralsavers.or.jp
http://www.coralsavers.or.jp

NPO法人海に学ぶ体験活動協議会 CNAC

人類にとって海はかけがえのない存在です。豊かで美しい海を次世代へ継承し、持続可能な社会を創造するためには、多くの人々が海辺の活動を通して海を学び、海の環境を保全することが大切です。団体や個人が幅広いネットワークを組み、協力することで、活動の場を充実させ、活性化させることができます。「海辺の体験活動」は、海と人との豊かな関係だけでなく、健やかな心と体を育み、人と人とのより良い関係を築きます。私たちは、多くの人が海辺の自然を楽しみ、学び、海への正しい理解を深め、その活動が積極的に行われることを願い、海に関わるネットワーク団体として活動しています。



E-mail: cnac@wave.or.jp
http://www.cnac.ne.jp

何からはじめる? 「海守」活動

海守は、日常生活および社会活動を通じて、海上における不審な事象や海洋汚染についての連絡や、海岸の保全等を支援するなど、国民生活の安全確保と海洋環境の保全を目的に生まれた団体です。海におけるさまざまな問題を知ったり、実際に活動を企画・参加したりしながら、私たちの海の自然や海周辺の生活や暮らしの安全を守っていきましょう。

118番通報

沿岸・近海で、不審な船を見たり、犯罪行為(密航・廃棄物等の不法投棄など)に遭遇した場合は、海上保安庁が運用する緊急番号「118番」に連絡しましょう。

環境問題を知る

海ゴミや絶滅寸前の生物など、海で起きているさまざまな問題に関心を持っていきましょう。海守ブログ(<http://blog.canpan.info/umimori/>)ものぞいてみてください。

イベントを企画・参加

全国で開催されている環境学習や環境保全活動に参加したり、また、自らのアイデアで「海守」の活動を企画し、イベントとして成功させていきましょう。メルマガや会報誌を通じて、ドンドンお知らせします。

海守の協力団体

海洋政策研究財団

B&G財団

日本海事広報協会

日本海難防止協会

海上災害防止センター

船の科学館

全国漁業協同組合連合会

日本水難救済会

日本マリーナビーチ協会

その他、多数



E-mail: info@ows-npo.org
http://www.ows-npo.org/

NPO法人海辺つくり研究会

市民活動団体、行政、研究者、漁協、学校、企業、ダイバー、ライフセーバー、ウインドサーファーなどが連携、協働して、海の自然環境を再生させるために、海のゆりかごともいわれている「アマモ」の移植活動を行っています。横浜での活動がきっかけとなり、全国的にも活動の輪が広がっています。活動は、種の採取から苗の育成、移植だけでなく、小学校への出前授業、全国アマモサミットの開催、アマモ場再生のガイドラインづくりなど多岐にわたります。アマモ場の再生は、海辺の生態系の再生だけでなく、希薄化してしまった海辺の自然と人間との関係を再生させることや、自然環境を通じて人間同士の関係を再生させることが目的です。



E-mail: umibeken@nifty.com
http://homepage2.nifty.com/umibeken

海の生き物を守る会 AMCO

多様な海の生き物が、人知れず減少し、絶滅しつつあります。「海の生き物を守る会」では、防災や経済発展のために環境が破壊された海の生き物の危機を救うため、研究者と市民をつないで沿岸環境の保護活動を行っています。創設1年余ですが、北海道、千葉県、神奈川県、山口県、和歌山県などの海岸で市民参加の自然観察会を開き、研究者による講演会を開いてきました。また、誰にでも簡単にできるマニュアルを作り、全国の市民に呼びかけて砂浜海岸生物調査を行っています。砂浜消滅の原因の一つである陸と海の分断を救うため、自然を守るワークショップも開催しています。



E-mail: hiromuk@mtf.biglobe.ne.jp
http://www7b.biglobe.ne.jp/hiromuk/index.html

Part 1 うまい魚の 食べ方

オレは30年も魚河岸でマグロ屋をやってきたんだが、ヒヨクなことがきっかけで本なんか出しちゃって、最近じゃあ生意気にも原稿を書くやら、人様の前で講釈なんか垂れるようになった。だから柄にもなく『先生』なんて呼ばれることもあるけど、返事しねえことにしてるんだ。昔から言うだろ？先生と言われるほどのバカじゃねえってねっ！

「魚ってのはこーやって喰うとうめえよっ！」とか、「今の時期だったらこんなの喰うとイイよっ！」なんて偉そうに能書きをこいてるが、何を隠そうお坊ちゃまなオレは、ガキの頃には一切魚ってモンを喰ったことがなかったんだ。まあ今考えてみればただの食わず嫌いなんだけど、魚河岸に行くまではとにかく魚への興味すらなかったんだ。

ところが魚河岸に入って2ヶ月月したある日、衝撃的な出来事



築地魚河岸の三代目若旦那が語る「日本一うまい魚の食べ方」。魚が喰いたいからって、人間の都合を大自然の海にあわせちゃいけないよ。江戸っ子チャキチャキの粋な男が「魚で感じる」海の世界や社会問題。世界に誇る魚食文化をひも解きながら、本気でズバリ、物申す。

があつたんだ。魚は一切縁のなかったオレが、とある魚を見て率直に「あつ…コイツ美味そうだなあ〜」って思ったんだ。ほとんど食べたことがないオレがだよ！なんでそんなこと思ったのか、いまだに良く解らないけど、これって日本人の本能に近いところにある感性なんじゃないかなあ、と思う。長い歴史に育まれた魚好きのDNAってやつじゃないのかねえって。とにかくそこから魚の魅力にはまっていった。

その時、食べたのがイサキ。梅雨入り前「オレの『麦わらイサキ』ってヤツさ。この頃には包丁つかいもおぼつかなかったんで、クツチャクチャにしながら刺身らしきモノにして喰ったんだ。魚にはちと申し訳なかったけど、オレにとつて人生観が変わる味だったんだ。コリコリしてるがネッチョリしてて、ほど良い歯ごたえの後にくる甘み。何しろ「甘み」というものを魚に感じたのが本当に不思議だった。

その頃、甘いつてのはお菓子の類の味いなんだと思つた。それが18年間嫌つていた魚で味わつたのだから、本当に衝撃的だった。またこの時、美味いは甘いと通じてるもんなんだなあ〜ってこともつくづく感じたんだ。その驚き

があつたんだ。魚は一切縁のなかったオレが、とある魚を見て率直に「あつ…コイツ美味そうだなあ〜」って思ったんだ。ほとんど食べたことがないオレがだよ！なんでそんなこと思ったのか、いまだに良く解らないけど、これって日本人の本能に近いところにある感性なんじゃないかなあ、と思う。長い歴史に育まれた魚好きのDNAってやつじゃないのかねえって。とにかくそこから魚の魅力にはまっていった。

その時、食べたのがイサキ。梅雨入り前「オレの『麦わらイサキ』ってヤツさ。この頃には包丁つかいもおぼつかなかったんで、クツチャクチャにしながら刺身らしきモノにして喰ったんだ。魚にはちと申し訳なかったけど、オレにとつて人生観が変わる味だったんだ。コリコリしてるがネッチョリしてて、ほど良い歯ごたえの後にくる甘み。何しろ「甘み」というものを魚に感じたのが本当に不思議だった。

特に日本近海には豊かな漁場がたくさんある。その上日本には明確な四季と、世界に類を見ないほど綺麗で豊富な水がある。この環境があつたからこそ今の魚食（特に刺身！）があるんだよ。

ただ最近それがちよつと変わつてきちゃった。消費者は特定の

漁場で捕れた気に入った魚だけを求め、季節もお構いなしに目先の変わった新しいものばかりを好むようになってしまつてい。さらには自分で調理することもせず能書きばかりこいて、拳句の果てには右手に携帯、左手にはグルメ本を持ち「美味しい魚」ではなく「美味しい店」探しに血道をあげている。そこにマスコミの連中が「〇〇の魚は最高！」なんて煽る。俺には何

が最高なんだか良く解らねえが…漁師だつて商売だから、より高く売れる魚をより多く捕ろうとする。その結果起きてしまうのが乱獲だ。これから子供を産もうつて魚を捕つちまったり、まだ成魚になつてない魚を取り続けてたらどういうことが起きるか、誰だつて解ることだろう。人間様のがままな嗜好に合わせて自然をいじくつちまったら海自体がおかしくな

つちまうぜ。実は、今の状況は漁師だけに任せつきりにしていられる場合じゃなくなつてきてるんだ。流通業者は勿論、消費者自身も襟を正して考えなきゃいけない時代になつてきてるんだ。

でもそれはそんなに難しいことじゃないんだよ。オレ達人間が積極的に自然の都合に合わせていけば良いことなんだ。オレ達はちよ

つと傲慢になつちまつたつていう気がするよ。なければ我慢すりゃいいんだよ。捕れた魚をいろいろと工夫をして、より美味しく食べると。これって昔から日本人がやってきたことなんだ。何も難しいことじゃないんだよ。自然に合わせりゃいいつてこと。それだけで美味しい魚が喰えるようになるんだぜ。海つてのはホントにありがてえよなあ〜



生田興亮（いけたよしかつ）
築地魚河岸「錦子」三代目。1962年東京都生まれ、築地市場でマグロ卸業を営む傍々、講演会や執筆活動、テレビ出演などを通じて日本特有の魚食文化の普及に努める。国際魚食研究所所長、「魚食スベニヤリスト検定」を主催する。海守会員番号：33020602

イラストレーション：つがおかー孝

Part 2 ビーチ コーミングの すすめ



80年前に拾った貝殻と当時の材木座海岸（写真上）



海岸には人工物、自然物のあらゆる物が漂着する。森、街、川を通して流れ着いた物、外国から海流に乗ってたどり着いた物、地先からの物……など実にさまざま。この漂着物を「拾い、集めて、考える」ことをビーチコーミング Beachcombingという。例えば貝殻をテーマにした場合、拾ってコレクションにしたり、アートに活かしたり……。さらにどんな種類の貝が生息しているのか？といった学問的な貝類の研究までも追及できる。また、漂着物ひとつひとつにメッセージが詰まっている。漂着物を手にして、それがどういう経路で流れ着いたのかなど、その由来に思いを馳せることもビーチコーミングならではの醍醐味である。

ところで相模湾を目の前にして生まれ育った私は45年以上にわたり、地元魚河岸でビーチコーミングを行っている。子供の頃は台風の到来が楽しみで夜も寝れなかった。なぜなら1960年代の海は健全で、台風通過後にはバケツいっぱい貝やウニ、ヒトデ、魚などが生きのまま拾えたからだ。それが1970年代に入ってから、打ち上がる生物は急速に激減、顔ぶれも変わってしまった。よどんだ海に生息する生物や帰化生物が目立つと同時にプラスチックを中心とした人工物が蔓延する海になってしまったのだ。このように年月をかけて漂着物に接すると時代の流れや環境の変化までも読み取ることができる。ビーチコーミングは間口も奥行きも広い新しい学問である。子供も大人もビーチコーミングの眼で漂着物に向き合えば、自然の大切さや環境を守る心が芽生えることだろう。

上の写真は、つい今しがた集められ貝殻のようだが、実は80年もの歳月を経たタイムカプセルである。貝は私がサクラガイのシンポジウムでの講演中、受付に置かれていた。鎌倉市在住の絵本作家長野ヒデ子さんが「こんな奇麗な貝を独り占めにはできない」という思いからである。瓶に詰まった貝殻は長野さんが散歩中、解体中の古い日本家屋で見つけた。ロシア文学の本の脇に置いてあったものらしい。家主の話では、家の元使用者は、ロシア文学研究家の女性で1910年生まれ、少し前に亡くなったという。女性は若くして体調を悪くしたため、貝は昭和初期に集められたらしい。貝を専門的に観ると、現在見られなくなった貴重な種類が多々含まれている。いかに当時の海が健全だったかがわかる。女性がどのような思いで浜を歩いて貝を拾ったのか？漂着物から漂い出るロマンあふれる空想はとどまることがない。



池田等（いけだひとし）
葉山しおさい博物館館長。1951年神奈川県生まれ。研究分野は海洋生物学。子供の頃から相模湾の海洋生物を収集し続け、その数は博物館が数件できるほど膨大。その中には漂着物の資料も多々含まれている。現在、葉山しおさい博物館に展示されている海洋生物はコレクションの一部、とりわけ漂着物の展示はユニークで一見の価値がある。海守会員番号：33020947

知っていますか、海の問題

密漁

海を守ることは一朝一夕ではできません。一人一人が問題意識をもつて関わっていくことが求められています。環境、資源保護、安全……、海に関して解決すべき問題にはさまざまなものがあります。なかでも混沌としているテーマが「密漁」です。密漁を巡っては、立場や考え方の違いから、さまざまな意見が交わされています。そこで今回から数回に渡り「密漁」について取り上げていくことにします。

そもそも魚介類って 誰の持ちもの？

手がかりを探すために、まずは辞書をひもこいてみましょう。「スバリ」「密漁」を引いてみると、「法を犯してひそかに漁をする」と「(広辞苑)とあります。分かったような、分からないような……。それぞれの国で定められた「法」を破ることがいけないことは容易に理解できます。では「ひそかに」というのはどういうことでしょうか。これも調べてみると「人に知られないように」と出ています。では「人」とは誰のことでしょうか。人が所有する土地や家屋に入るのにもちろん、そこで何かを盗るのがいけないことは誰でもわかります。



でも陸地と違って、海は土地ではありませんし、ましてや家もありません。では漁師のことでしょうか？ 漁師に知られずに漁をする。いけないことのようにも思えますが、どうもしっくりきません。

今度は少し角度を変えて考えてみましょう。「密漁」は窃盗になるのでしょうか。窃盗とは人が所有している財産や物を盗むことです。となれば、密漁する対象がそれに該当するかどうか問題になります。

魚介類は誰の持ちものか？ わかりやすいところでは、養殖している魚は育てている人がいるわけですから、それを誰かが黙って持っていけば立派な犯罪でしょう。では自由に泳ぎ回っている魚や磯などにいる貝などはどうでしょうか。持ち主のいる



山に入って松茸をとれば、不法侵入でも窃盗になりますが、海で泳いでいる天然の魚は、所有者が決まっているわけではないので、密漁は窃盗とは異なります。ただし各地域の法令で、勝手に魚を捕れば罰せられることがあります(その事例については今後見ていきましょう)。

漁業との関わりで、密漁を考えてみると

ここで、魚介類を獲って生計を立てている「漁業」という仕事について確認しておきましょう。自動車や「合法的」に運転するためには免許が必要です。これと同じように漁業を「生業」とするには都道府県知事から免許を取得しなければなりません。免許を受けずに許可を与える行政「人」に黙って(生活のために漁をすれば「密漁」、つまり法律違反になるわけです)。

では、生計のためではなく魚を獲るのはどうでしょうか。前にも触れましたが、天然資源の魚介類には所有権、占有権が認められていません。という事は「遊び・レジャー」であれば、どんな魚介類も自由に獲っているのでしょうか。一見、問題はなさそうですが、

実際には、漁業法や水産資源保護法、都道府県の漁業調整規則などで採取するときに使うことのできる漁具や漁法、禁止区域、禁止期間、魚種ごとの大きさの制限、夜間の照明利用の禁止や制限など、さまざまな規則が定められています。これらの規則に違反すれば「密漁」ということになり、懲役や罰金の対象になります。

漁業を免許制にしたり、漁業権を設定する、あるいは漁に関する背景には、乱獲を防止し魚介類の繁殖や保護を図ったり、食料を供給する業種である漁業の調整(供給や価格の安定)をするなどの目的があります。

無免許で仕事として漁をし、決められた漁具・漁法を守らなかつたり、獲ってはいけない魚を獲るなどの違法行為は論外です。しかし、水産庁、各都道府県

このコーナーへのご意見、ご感想をお寄せください!

密漁の問題は、本文にもありますが、立場や考え方の相違によって多様な意見があり、そう簡単には結論でない複雑なテーマです。ただし、それぞれの立場で異なるルールや考え方を冷静に受けとめ、そうした意見が生まれる背景や現状を正しく考えていくことは私たち海守のメンバーにとって大切なことです。ご意見やご感想、何でも受け付けますので、どうぞ海守事務局までお寄せください。匿名でも結構です。

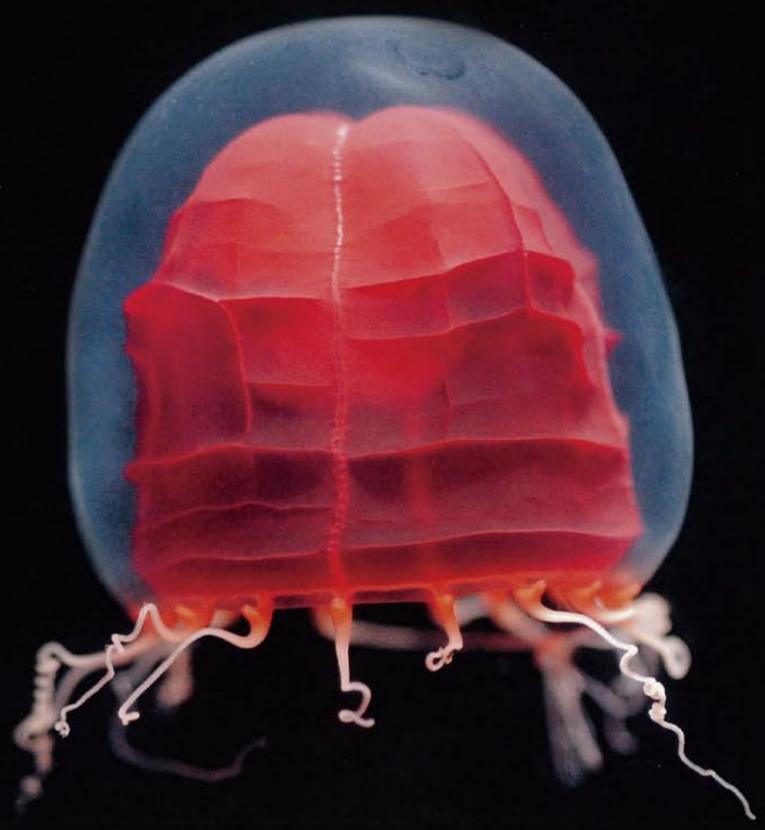
皆さんに「密漁」について意識を持ってもらえるよう、次号からはさまざまな立場の見解を紹介しながら、「密漁」の問題を考えていきたいと思います。

不思議な海の住人たち

File No. 01

アカショウチンクラゲ

学名: Pandeia rubra
体長: 約17センチ
触手: 14~30本あり、長さ傘高の6倍以上



© Dhugal J. Lindsay / JAMSTEC

地球の表面積の70.8%が海です。しかも、深さ200m以深の深海は、容積すると全海洋の90%以上。地球における最大の生命生息地と言っても過言ではありません。そんな広大な海を住み処とする住人には不思議な生物が無数に存在していますが、なかでもクラゲはひととき目立つ存在。海に生息するクラゲの種類は1000以上。無生殖世代のポリプなども含めれば、数万近くの種類にのぼると言われています。もし、宇宙人が地球を見たしたら、地球はクラゲの惑星だと勘違いすると思えるぐらい、海には無数のクラゲが存在しているのです。

しかし、餌の少ない真っ暗な深海において生息するクラゲの生態については、まだまだ未知な部分が多くあります。海洋の食物連鎖においても、クラゲが重要な役割を担っていることは想像できるのですが、その実態についてはほとんどわかっていません。エビや魚の胃袋を調べても、クラゲは消化されやすくすぐに溶けてしまい記録がないのです。

クラゲを捕獲するにしても、繊細なクラゲの原型をとどめることは難しく、種別を判別できないことも多くあります。捕獲されたクラゲのパーツを元に、しかも数もまだ少ない過去のデータと照らし合わせていくわけですが

から、解答のないパズルを解いていくようなものです。

それが、深海探査機器の発達によって、ここ数年、ほぼ完璧に近い奇麗な形での撮影や捕獲が可能となってきたのです。ここに紹介する奇麗な紅色をしたクラゲもそのひとつです。赤い傘が、よじれたり、しわくちゃになったり多様な形を描きながら、深海を泳ぐ様子が、伸縮する提灯のように見えることから、JAMSTECのドゥーグル・リンズィーさんがア



© Dhugal J. Lindsay / JAMSTEC

体の95%以上は水分を多く含むゼリー状物質。その美しく透き通った透明のボディは、深海で周囲に身をなまかせて隠す役割となるほかに、多様な生物の住処や幼生の生育場所としても利用される。アカショウチンクラゲの体にはそれまでウミグモ類(写真右)が付着していることが知られていたが、今回のJAMSTECの調査では、あらたに体長1センチほどのヨコエビやヤドリクラゲの幼生など、多くの生物がアカショウチンクラゲを住処としていることも解明された(写真左はアカショウチンクラゲの傘の内部に付着して成熟するヤドリクラゲ)。鮮やかな紅色を発するアカショウチンクラゲも、深海に潜ると「紅」は黒っぽく見え、保護色となる。

カショウチンクラゲと名付けました。

リンズィーさんら研究員は、無人探査機と有人潜水船を駆使し、日本近海でのクラゲ類の調査研究を進めており、昨年秋に、日本付近の深海で60匹以上のアカショウチンクラゲを確認。このクラゲは、1913年にベーリング海ではじめて発見されて以来、世界各地で捕獲されたものの、その生息分布や生態については謎に包まれていました。その貴重な幻のクラゲが、日本海溝周辺の水深500mに多く生息していることが今回、判明されたのです。



ドゥーグル・リンズィー (Dhugal Lindsay) 海洋生物学者。1971年豪州クィーンズランド州生まれ、日本在住。JAMSTECに所属し、中・深層に漂う浮遊生物の研究を行う。アカショウチンクラゲの名付け親でもあるとともに、自らつけた和名クラゲは30種類以上。高画質カメラ搭載の小型探査機「ピカソ」(一緒に写っている赤い艇)も同僚と共に開発し、未知なる要素の多い浮遊生物の解明にいそんでいる。

写真提供: 独立行政法人海洋研究開発機構 (JAMSTEC)